NCGM
National Center for Global Health and Medicine

http://www.hosp.ncgm.go.jp/

国立国際医療研究センター病院

臨床研修／募集案内

NCGM

JUNIOR RESIDENCY PROGRAMS

ご　挨　拶

医師としての基本を身につけ 将来の目標を見つけよう

国立国際医療研究センターは、臨床研修医として当センターで研鑽を積まれる皆さんを心より歓迎します。
医師としての第一歩を踏み出す臨床研修が重要であることは言うまでもありませんが、幸いなことに当センターには、臨床能力の高い指導医クラスの医師が多数活躍しており、全員が教育・人材育成に情熱を持って取り組んでいます。当センターの臨床研修では、医師として必要な基本技術や患者さんとのコミュニケーションの手法を習得できるのみならず、診断・治療における論理的考え方や全人的医療とは何かということを体感・学習できると確信しています。また、当院には国際医療協力局も設置されており、海外での活躍を希望する若手医師に最適なキャリアパスも提供しています。また、二つの英文機関誌 GHM（Global Health Medicine），GHM Open を創刊し、若手医師の英文論文投稿を推奨するとともに執筆の支援も始めました。
当センターで臨床研修を修了され、医師として今後に飛躍するためのしっかりとした土台を作って下さい。

理事長　國土 典宏

充実した臨床研修を 国立国際医療研究センター病院で

当院は総合的医療を基盤とする高度急性期病院です。国際感染症対応、糖尿病診療、エイズ治療、救急医療等に特色がありますが、全ての診療分野で専門医が連携を取り合う診療体制が整ったナショナルセンター唯一の総合病院です。合併症のある患者さんの外科手術、複雑な内科疾患の診療、原因不明な疾患等に対処する総合診療も当院の特長であり、様々な症例を経験することが出来ます。さらに、研究的志向を持った臨床医を目指す方や国際医療協力、医療行政等に関心のある方にも相応しい病院です。当院で臨床研修を行うことにより、医師として必要不可欠な幅広い基礎や人間的な素養を身に付けることが出来ますので、志の高い皆さんを心より歓迎致します。

病院長　杉山 温人

医師としての第一歩を踏み出す皆さんへ

医師となり最初の2年間に行う臨床研修はとても大切です。この2年間の経験が、その後皆さんが医師としての活躍するための礎となります。

当院は、ナショナルセンターと呼ばれる6つの国立高度専門医療研究センターの中で唯一、総合病院を持ち臨床研修医を受け入れている施設です。

明治時代の東京陸軍病院、第二次世界大戦後の国立東京第一病院などを経て発展を続けてきた長い伝統を有する国立の総合病院ですが、同時に、我が国の代表的な卒後研修施設であり、全国に先駆けてローテーション研修を導入し、全国から数多くの若手医師を受け入れてきました。

平成16年に必修化された新医師臨床研修制度の導入後も、特徴ある6つの臨床研修プログラムを開発、調整するなど進化し続けてきました。

全国有数の多くの救急車を受け入れている救命救急センターや総合診療科における豊富な未診断common diseaseを有する患者さんの診療経験により、医師としての基礎体力を培ってもらいます。
また各科の研修では、多様な入院患者さんの診療に携わってもらいます。外来、入院ともに熱心な指導医たちが皆さんを指導します。診療科間の垣根が低く、研修の大半をセンター病院のみで完結できることも当院の特徴です。

他院にない特徴として、日本の国際保健医療のメッカである国際医療協力局、感染症危機管理など高水準の感染症臨床を誇る国際感染症センター、症例集積的研究を行う臨床研究センター、先端的な基礎研究を行う研究所など、組織としても多様性と多彩なキャリアパスの選択肢を備えています。臨床研修を終えたのちも多岐に亘る分野において活躍の機会を提供いたします。

将来の医療を担う責任感とリーダーシップのある医師になっていただくよう、医療教育部門スタッフを中心に全指導医を挙げて力を尽くします。当院で臨床研修を行っていただけることを心よりお待ちしてます。

スタッフ紹介

副院長（教育担当）
梶尾 裕

医療教育部門長
放生 雅章

副医療教育部門長
（臨床研修担当）
稲垣 剛志

センター病院の沿革、理念、組織図、診療実績などの概要はホームページからチェックして下さい。

研修概要

研修の特徴

1. 市中病院と大学病院の良さを兼ね備えたプログラム

市中の大規模急性期総合病院でありながら、臨床研究センターや研究所などの研究機能を有する、大学病院並の高度先進医療を行う特定機能病院でもあり、市中病院と大学病院の２つの性格を併せ持っています。

2. 豊富な未診断症例と充実した指導体制

年間救急搬入数は 11,000 件を超え、未診断の common disease 症例から希少疾患まで、質・量共に豊富な症例に恵まれています。また、臨床能力に優れた指導医を中心に、手厚い「屋根瓦方式」の指導体制をとっており、常勤医の 70%以上は厚生労働省の臨床研修指導医資格を有しています。

3. 病院の医師・メディカルスタッフ全員で研修医を育てる姿勢

将来の医療を担う責任感とリーダーシップのある医師になっていただくよう、２年間を通じて医師のみではなく看護師らメディカルスタッフを含む全ての医療従事者が応援いたします。

4. 研修医同士の強い絆

全国各地から集まった研修医は２年間、病院敷地内の教育研修棟で生活を共にしつつ、研修の大部分を基幹型病院で行います。このため、研修医同士の絆は強く、教え教えられる環境の中でお互いに切磋琢磨しつつ、確実に臨床能力を向上させることができます。

研修プログラム

2年間のローテーションスケジュール

医科では、内科系、外科系、救急科、総合診療科、小児科、産婦人科の６プログラムがあります。各科ローテーションは４～８週単位（1クール）となっています。
全プログラム共通のコア・ローテーション（64～66週）と各プログラム固有のローテーション（34～36週：自由選択を含む）に大別されます。
※現時点のものであり、今後、一部変更される可能性があります。

各プログラム共通のコア・ローテーション	64~66週	各プログラム固有のローテーション	自由選択	34~36週

全プログラム共通コア・ローテーション：64～66週

※令和4年度実績

コア・ローテーションでは消化器内科、呼吸器内科、循環器内科を各６週間、腹部・一般外科を８週間、救急科を12週間、麻酔科を６～８週、小児科、産婦人科、総合診療科、精神科、地域医療を各４週間、合計で64～66週間研修します。この期間だけで厚労省の定める「臨床研修の到達目標」の大部分が達成できます。

消化器内科	6週	呼吸器内科	6週	循環器内科	6週	腹部・一般外科	8週	救急科	12週	麻酔科	6~8週
小児科	4週	産婦人科	4週	総合診療科	4週	精神科	4週	地域医療	4週		

各プログラム固有のローテーションおよび自由選択：34～36週

※令和4年度実績

コア・ローテーション以外の期間は、下記6つのプログラムで異なり、各プログラムの内容を重点的に研修します。

内科系プログラム 36週

内科重点コース

内科１	4週	内科２	4週	内科３	4週	内科４	4週	内科５	4週	内科６	4週	内科７	4週	自由選択	8週

診療科重点コース

内科選択１	4週	1つの内科系重点診療科を選択（皮膚科・リハビリテーション科・放射線科より）	24週	自由選択	8週

外科系プログラム 34週

自由選択コース

神経選択	4週	内科必修選択	6週	外科選択１	4週	外科選択２	4週	外科選択３	4週	外科選択４	4週	自由選択	8週

診療科重点コース

神経選択	4週	内科必修選択	6週	1つの外科系重点診療科を選択（腹部・一般外科、心臓血管外科、呼吸器外科、脳神経外科、整形外科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、形成外科、麻酔科、病理科）	16週	自由選択	8週

救急科プログラム 36週

整形外科	4週	放射線科	4週	脳神経外科	6週	救急科	8週	内科必修選択	6週	自由選択	8週

総合診療科プログラム 36週

整形外科	4週	放射線科	4週	神経内科	6週	救急科	4週	小児科	2週	総合診療科	8週	自由選択	8週

小児科プログラム 36週

小児科	20週	内科必修選択	8週	自由選択	8週

産婦人科プログラム 34週

産婦人科	20週	内科必修選択	6週	自由選択	8週

内科系プログラム JUNIOR RESIDENCY PROGRAMS

募集定員 13名

プログラム責任者
片桐 大輔

副プログラム責任者 坊内 良太郎
副プログラム責任者 岡﨑 徹
副プログラム責任者 橋本 理生
副プログラム責任者 大武 優希

内科医として必要不可欠な「内科力」修得を目的とするプログラム

将来内科系領域で診療に従事する上で「内科力」の習得を目的に、内科系診療科を中心にローテーションする研修プログラムです。ローテーション期間は4週間を1単位とし、コアローテーション（内科必修18週・救急科12週・外科8週・麻酔科6週・小児科・産婦人科・総合診療科・地域医療・精神科各４週）を基礎に行われます。採用試験の申込時に①内科重点コースまたは②診療科重点コースの選択ができます。①内科系プログラム内科重点コースでは、コアローテーションである内科3科（消化器内科、循環器内科、呼吸器内科・各6週）に加え、残り28週は内科7科（神経内科、糖尿病内分泌代謝内科、膠原病科、血液内科、腎臓内科、総合感染症科、ACC）を各4週ずつローテーションすることで、内科の基本を幅広く、かつある程度深く研修することができます。また自由選択枠として8週は全ての診療科から選択可能です。②内科系プログラム診療科重点コースでは、皮膚科、放射線科、リハビリテーション科を目指す研修医のためのコースです。コアローテーションに加えて特定診療科（皮膚科、放射線科、リハビリテーション科から選択）の研修を24週間通して行うため、これら領域での専門医資格取得を目指して適切なスタートを切ることができます。

ローテーション例

コア科目　プログラム科目

■ 内科重点コース

内科１ 4週	内科２ 4週	内科３ 4週	内科４ 4週	内科５ 4週	内科６ 4週	内科７ 4週	自由選択 8週

内科Ｉ～7：腎臓内科、血液内科、糖尿病内分泌代謝科、膠原病科、神経内科、総合感染症科、ＡＣＣの７診療科全てを４週ずつ研修する。
コアローテーションに含まれている循環器内科、消化器内科、呼吸器内科は内科Ｉ～7には含まれない。
自由選択では乳腺・腫瘍内科（がん総合診療センター）や2度目の内科系診療科のローテーションを選択することが可能である。

1年次	オリエンテーション 1週	消化器内科 6週	循環器内科 6週	腎臓内科 4週	救急科 4週	救急科 4週	総合感染症科 4週	麻酔科 6週
	血液内科 4週	総合診療科 4週	小児科 4週	自由選択 4週				
2年次	神経内科 4週	精神科 4週	膠原病科 4週	地域医療 4週	腹部・一般 外科 4週	腹部・一般 外科 4週	糖尿病内分泌代謝科 4週	呼吸器内科 6週
	救急科 4週	産婦人科 4週	自由選択 4週	ACC 4週				

外科系プログラム JUNIOR RESIDENCY PROGRAMS

募集定員 8名

プログラム責任者
三原 史規

副プログラム責任者 井上 雅人
副プログラム責任者 日野原 千速

外科系領域で必要不可欠な基本的臨床能力をフレキシブルに修得できるプログラム

外科領域における総合性と専門性の両立を目指し、多様な研修ニーズへの対応を目指す本プログラムは、将来外科系領域で診療に従事する上で必要不可欠な基本的臨床能力の修得を目的としています。コアローテーション（内科必修 18 週、救急科 12 週、外科 8 週、麻酔科 8 週、小児科、産婦人科、精神科、総合診療科、地域医療各 4 週）に加え、内科必修選択（6 週）および神経選択（4 週）それぞれ 1 クールが必須であり、残りの 16 週間（4 週× 4 クール）を各コースに則り、ローテーションをします。外科系プログラム自由選択コースでは、外科領域に興味があるが、まだ特定の診療科が決まっていない状態であり、外科系各科をローテーションしつつ内容を知った上で専門研修に繋げたいという研修医には魅力的なコースです。外科系プログラム診療科重点コースでは、すでに外科系の中で特定領域の専門医を目指すことが決まっている研修医は、16 週全期間を 1 つの診療科の研修に充てることや、1 つの診療科を中心に周辺領域の研修科目と組み合わせるなど、個人個人の目的に合わせて柔軟に研修ローテーションを組み立てることができます。なお、当プログラムでは、麻酔科や病理科なども外科系選択科目に含まれているのも魅力の 1 つであり、同じように 16 週を自由にデザインすることが可能です。

ローテーション例

コア科目　プログラム科目

■ 自由選択コース

神経選択 4週	内科必修選択 6週	外科選択１ 4週	外科選択２ 4週	外科選択３ 4週	外科選択４ 4週	自由選択 8週	

外科選択１～５：腹部・一般外科、心臓血管外科、呼吸器外科、脳神経外科、整形外科、泌尿器科、眼科、耳鼻咽喉科、形成外科、麻酔科、病理診断科、救急科、ＩＣＵの 13 診療科から、研修医が自ら 4 週間ずつ選択してローテーションを組み立てることができる。

1年次	オリエンテーション 1週	消化器内科 6週	整形外科 4週	救急科 4週	救急科 4週	泌尿器科 4週	麻酔科 8週	病理診断科 4週
	総合診療科 4週	小児科 4週	自由選択 4週	神経選択 4週				
2年次	精神科 4週	内科必修選択 6週	地域医療 4週	腹部・一般 外科 4週	腹部・一般 外科 4週	呼吸器外科 4週	呼吸器内科 6週	救急科 4週
	産婦人科 4週	自由選択 4週	循環器内科 6週					

救急科プログラム JUNIOR RESIDENCY PROGRAMS

募集定員 3名

プログラム責任者
小林 憲太郎

救急科診療ことはじめプログラム
臓器に特化しない総合的な救急科専門医への基礎習得を目指す

総合救急初期診療と救命救急医療の能力を兼ね備えた救急科専門医となるための基礎を習得するプログラムです。コアローテーションに加えて、救急科の外来診療並びに病棟管理の研修を強化し、救急医療に強く関連する診療科へのローテーションを付加してあるところがこのプログラムの特徴です。様々な重症度の救急患者の高度総合救急医療をめざし、その基礎として上級医に引き継ぐまでの呼吸循環の安定化に必要な能力と命を脅かしかねない疾患の見落としを回避する能力の習得を主たる目標としています。ABCDE アプローチを基にした診療法を積極的にとりいれた教育・指導が実践され、救急科研修期間の20 週間で外来での初期診療と病棟での患者管理・集中治療を経験することができます。また自由選択枠を拡大しましたので（自由選択4週x2、および内科必修選択6週にて合計14週間）より一層幅広い研修を行うことが可能です。Off-the-job training については、二次救命処置（ICLS)のインストラクターになることを目標とします。能力に応じて学会発表、論文作成の機会があり、臨床研修修了後は引き続き専門研修への道が開かれています。

ローテーション例

コア科目　プログラム科目

1年次	オリエンテーション	1週	救急科	4週	消化器内科	6週	循環器内科	6週	救急科	4週	麻酔科	6週	総合診療科	4週	小児科	4週		
	自由選択	4週	救急科	4週	内科必修選択	6週												
2年次	脳神経外科	6週	精神科	4週	地域医療	4週	腹部・一般 外科	4週	腹部・一般 外科	4週	呼吸器内科	6週	救急科	4週	産婦人科	4週		
	救急科	4週	整形外科	4週	放射線科	4週	自由選択	4週										

総合診療科プログラム JUNIOR RESIDENCY PROGRAMS

募集定員 3名

プログラム責任者
稲垣 剛志

バランスの取れたプライマリケアの力を養う

２年間で総合診療科と救急科、小児科等を多く研修していただく他、神経内科研修を含めることで、病歴聴取と身体所見を重視しバランスの取れたプライマリケアの力を養うことに重点を置きます。また、自ら学んだことを同僚たちに教える経験をし、自分自身の行った診療を振り返る習慣をつけていただきます。柔軟で忍耐強く、患者さん一人ひとりを大切にできる医療人になっていただきたいと考えています。臨床研修終了後は NCGM センター病院等の総合診療専門研修プログラムへ進む場合や他の専門分野を選ぶ場合があり、いずれもサポートします。総合診療科プログラムでは、他科をローテーション中も学会発表の支援をしたり、研修でのつまずきをフォローしたりと、当科スタッフが 2 年間一貫して本プログラムの研修医を育てて行きます。

ローテーション例

コア科目　プログラム科目

1年次	オリエンテーション	1週	総合診療科	8週	精神科	4週	救急科	4週	救急科	4週	循環器内科	6週	呼吸器内科	6週	神経内科	6週		
	小児科	6週	麻酔科	6週	自由選択	4週												
2年次	腹部・一般 外科	4週	腹部・一般 外科	4週	産婦人科	4週	救急科	4週	自由選択	4週	放射線科	4週	地域医療	4週	消化器内科	6週		
	総合診療科	4週	救急科	4週	整形外科	4週												

小児科プログラム JUNIOR RESIDENCY PROGRAMS

募集定員 2名

プログラム責任者
瓜生 英子

小児科医に必要とされる「総合的臨床能力」の獲得を目的とした研修プログラム

小児科医師としての「総合的臨床能力」を身につけると同時に、専門性確立を目指すプログラムです。周産期医療を含む小児科全領域の基本診療を中心に、他の診療部門や職種との協力体制を通し、医師としての基本を身につけることができます。小児科一般病棟における急性疾患を中心に、指導医と重症疾患の診療も行います。新生児診療では、正常新生児と低リスク未熟児を中心に、重症児の診療も行うことができます。高度先進医療の一翼を担う未熟児医療や造血幹細胞移植にチーム医療の一員として参加し、上級医・指導医を交えた討論や症例検討を通してきめ細かな指導を受け、同僚や上級医との交流を通し自分の将来像を見据えることができます。小児科は、成人内科のような細分化された疾患概念がありながら、常に総合的な診療を求められます。患児の身体的、精神的な側面に配慮したトータルケア能力、家族や養育環境などの社会的要素も考慮した診療能力の獲得を目標としています。

ローテーション例

コア科目　プログラム科目

1年次	オリエンテーション	1週	小児科	4週	小児科	4週	循環器内科	6週	救急科	4週	救急科	4週	小児科	4週	総合診療科	4週				
	麻酔科	6週	消化器内科	6週	自由選択	4週														
2年次	呼吸器内科	6週	小児科	4週	地域医療	4週	腹部・一般 外科	4週	腹部・一般 外科	4週	内科必修選択	4週	内科必修選択	4週	小児科	4週				
	産婦人科	4週	精神科	4週	救急科	4週	小児科	4週	自由選択	4週										

産婦人科プログラム JUNIOR RESIDENCY PROGRAMS

募集定員 2名

プログラム責任者
大石 元

産婦人科医としての基本の習得を重点に、計34週間の産婦人科研修を行うプログラム

レジデントまたはフェローが常時マンツーマンで指導の下、基本的な産婦人科診察法を身につけます。婦人科入院患者に対しては上級医とともにチームを作り、受持医の一員として患者の診療にあたり、婦人科腫瘍学、生殖医学、周産期学の基本的な疾患に対する診断・治療について学んでいきます。開腹手術や腹腔鏡下手術の第2助手として必要な技術（糸結び、鈎引き）を習得し、手術術式、骨盤解剖などに習熟します。産科では、正常妊婦の分娩管理を習得する他、合併症妊娠・異常分娩などの診断治療についても学ぶことができます。産婦人科ローテーション中は、月5～6回の産婦人科副当直を勤めることにより、産婦人科救急疾患の診断治療に習熟します。研修修了時には、子宮内容除去術やバルトリン腺嚢腫などの小手術、開腹による良性附属器腫瘍などの執刀者となるほか、正常分娩に立ち会い、会陰切開・裂傷縫合を行えるようになります。また、自験例の症例報告や臨床統計に関する学会発表を行うことも可能です。

ローテーション例

コア科目　プログラム科目

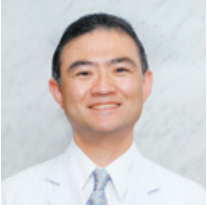
1年次	オリエンテーション	1週	総合診療科	4週	産婦人科	4週	救急科	4週	救急科	4週	麻酔科	8週	産婦人科	4週	産婦人科	4週				
	呼吸器内科	6週	小児科	4週	自由選択	4週	精神科	4週												
2年次	循環器内科	6週	消化器内科	6週	救急科	4週	産婦人科	4週	自由選択	4週	産婦人科	4週	腹部・一般 外科	4週	腹部・一般 外科	4週				
	地域医療	4週	内科必修選択	6週	産婦人科	4週														

JUNIOR RESIDENCY PROGRAMS

歯科 プログラム

募集定員
2名

当科は外傷、炎症、嚢胞、顎変形症、顎関節症、腫瘍や、HIVなど様々な感染症を持つ患者が多数紹介受診するという特徴があります。一方、総合臨床病院の歯科として、多彩な基礎疾患を有する患者の歯科・口腔外科治療（歯科インプラント含む）にとどまらず、救急病棟やICUなどに入院中の患者への口腔管理やNSTやRST、緩和ケアチームへの参加など多岐にわたって院内各科と密接に連携し診療を行っています。また、顎変形症患者の手術前後のレーザー三次元顔面形態分析や顎口腔領域に発生する血管奇形（血管腫）へのレーザー治療などわが国をリードする高度医療をはじめとし、MRONJや歯科分野での感染対策に関する研究、抗血栓療法や増血器腫瘍などと口腔領域との関係についての臨床研究、新規医療機器の開発などの医工連携事業も積極的に推進しており、単なる受け身の歯科医師ではなく、全身を視野に入れた顎口腔領域の専門医としての基本姿勢を学ぶと共に、将来必要となる実戦的な診療能力や応用力を身につけるためのベースラインの習得を目指しています。常識にとらわれることなく、自分で真理を追求し判断する「考える歯科医師」を養成するためには様々なものを見聞きし、経験し、知的好奇心を維持・発展させることが大事です。そのため、定期的に抄読会や症例検討会、勉強会を行っており、研修の一環として学会や勉強会への参加及び発表も積極的に推進しています。



歯科プログラム責任者
丸岡 豊

副プログラム責任者 田山 道太
副プログラム責任者 島田 泰如
副プログラム責任者 高鍋 雄亮

第1年次

指導医と共に、外来診療、病棟診療、手術に参加し、歯科口腔外科診療における基本的知識と技術とともに、総合病院の中での「顎口腔領域の専門医」としての立場を理解し、そのベースラインを修得する。与えられるのを待つのではなく自発的に勉強を進める姿勢を確立する。

■ **外来**　初診患者の診断法（診療録の作成、病歴聴取、現症記載、口腔顎顔面写真撮影、X 線写真撮影、バイタルサインの見分け方、各種臨床検査法、診断及び治療計画の立案、インフォームド・コンセントなど）、治療（基本的な保存修復治療、歯周治療、歯内治療、補綴治療、口腔外科治療など）

■ **病棟**　入院患者の術前評価（病歴聴取、現症記載、各種術前検査の意義・解釈・実施、手術術式の検討）入院患者の全身管理（静脈注射・点滴・導尿などの各種基本手技、術後創傷処置法、薬物療法、術後全身管理法など）救急病棟やICUなどに入院中の患者、周術期の患者への口腔管理や栄養サポートチームや呼吸ケアチームへの参加を積極的に行い、口腔管理の経験を積む。

■ **手術室**　手洗い法、ガウンテクニック、感染予防の知識手技、手術見学、手術介助、全身麻酔法の見学など

第2年次

第１年次の研修を踏まえて、配当患者を診療し、臨床研修を行う。

■ **外来**　保存系、補綴系、口腔外科系治療の基本的な技術の習得をめざす。また入退院支援センターから依頼された周術期等の口腔内チェックの業務にも積極的に関わる。

■ **病棟**　院患者の担当医など歯科口腔外科チーム医療の一員として治療に参加するとともに、入院中や周術期の患者の口腔管理の計画を立て、それを実践する。

■ **手術室**　手術に参加する機会を積極的に与え、簡単な手術には術者として参加する。

■ **他科研修**　麻酔科、救命救急センターの協力のもと、それぞれ長期の研修を行う。

■ **院外研修**　国府台病院の歯科と浜崎歯科クリニックにて研修を行う。浜崎歯科クリニックでは、訪問歯科診療や一般歯科医院での歯科診療などについて経験する。

研修歯科医評価

設定された到達目標に対する達成度を研修医の自己評価および複数の指導医による客観的評価、さらに研修修了発表や口頭試問、レポート提出などを総合的に評価し、認定する。

当院の歯科・口腔外科では一般歯科治療と口腔外科治療の双方において豊富な症例を学ぶことができます。1年次では主に新患担当の上級医のアシストをしながら治療方針や手技を学びつつ、全身麻酔で手術を行う患者の病棟管理を担当します。2年次では外来枠を一部担当するほか、上級医の指導のもと手術執刀を行います。また麻酔科・救急科で一定期間研修をすることでより専門的な全身管理を学ぶ機会もあります。外国からの患者が多いのも当院の特徴で、グローバルな診療について身をもって経験することができます。このような2年間の研修を通して多角的な視点を持った歯科医師を目指します。恵まれた環境の中、一味違った研修生活をぜひNCGMで過ごしませんか。

研修医VOICE

私達の成長を "オールラウンダー" に支えてくれる環境

内科系プログラム ｜ 2年次 波多野 裕斗先生

NCGMの環境、研修プログラムを一言で表すと"オールラウンダー"だと思います。当院の救急外来は都内トップクラスの救急車受け入れ台数であり、walk-in外来にも日々多数の患者様がいらっしゃいます。研修医は救急患者のファーストタッチを行い、診断治療の計画を立てていきます。また入院では希少疾患もさることながらcommon diseaseも多く、病棟管理を基礎からしっかりと学ぶことができます。業務に慣れてきたら学会発表や論文執筆の機会も数多くあり、臨床検体を使った基礎研究も並行できる環境があります。研修医の向上心に際限ないかのように応えてくれる病院です。医師としてのスタートを切る環境として自信を持ってお勧めします！

外科教育のフルコース！

外科系プログラム ｜ 2年次 大木 將平先生

NCGM外科の一番の特徴は幅の広さと懐の深さです。当院では"academic surgeon"として第一線で活躍する科長・スタッフを筆頭に全国から集まった研修医が日々診療に当たっています。年1万件搬送の救急外来からの緊急手術、虫垂炎などのcommon diseaseから癌の高難易度手術に至るまで症例には事欠きません。特に一般外科では病棟・ICU管理、手術執刀から論文執筆に至るまでフルコースの外科教育を体感出来ることでしょう。また8ヶ月の選択期間で研修医は進路に合わせて研修内容をカスタマイズしています。これだけ自由度と密度のバランスが取れたプログラムは他にありません。あなたもNCGM外科コースで外科医への第一歩を踏み出しましょう！

整った指導体制の下で子どもに向き合う

小児科プログラム ｜ 2年次 田辺 伶奈先生

私がNCGMを選んだ大きな理由は温かい雰囲気と整った指導体制です。とてもアットホームな雰囲気で上級医に質問しやすく、チーム内で相談しながら研修医も小児科の一員として子どもに向き合います。小児診療を支えるコメディカルの方も多く、チーム医療を実践しながら子どもとの上手な接し方も学ぶことができます。当直ではfirst touchを研修医が担当し、多くのcommon diseaseを経験することができます。研修医のうちからNICUで研修できるのも当コースの魅力の１つだと思います。また、NCGMでは切磋琢磨できる同期や相談しやすい学年の近い先輩が多く、日々刺激を受けながら研修を行えます。是非一緒に充実した2年間を過ごしましょう！

志望科をホームに

産婦人科プログラム ｜ 2年次 敦澤 美月先生

私が当院を志望したのは数多くいる優秀な同期から刺激を受けながら共に切磋琢磨しあえる点や、産婦人科を半年間ローテし、周産期、腫瘍、不妊治療まで幅広い症例を経験できることが理由です。産婦人科コースでは数回のローテの中で小手術の執刀や、会陰縫合などの処置を行いステップアップを踏めるため、志望科への一歩を歩めるプログラムとなっています。何よりも研修医でありながら、指導熱心な先生方の下、産婦人科をホームとして感じられるのは当院ならではだと思います。研修修了後も後期研修プログラムに進むことが可能なため、馴染みのある環境で専門医を取得でき、一貫した教育体制が敷かれている点も魅力の一つです。ぜひ皆さんと共にNCGMで働けたら嬉しいです。

多種多様な症例を頭と体で学ぶ研修生活を

救急科プログラム ｜ 2年次 木村 圭穂先生

本プログラムでは、都内随一の救急搬送数を誇る救急外来を主軸に、救急と関わりの深い診療科を中心に幅広く研修を行います。三次救命も含め多種多様な症例を上級医の手厚い指導の下で主体的に初療から関わるため、日々自分の成長を実感することのできるプログラムになっています。また、院内の救急講習会ICLSではインストラクターとして関わる機会もあり、蘇生や初療を一から学び、指導者としての立場を経験することで知識を深めることができます。救急科スタッフの方々も科の一員として迎え入れ、サポート、指導してくださるため、充実感のある楽しい毎日を送っています。興味のある方は是非一度、見学にいらしてください。そして熱く実りある2年間を、当院で送ってみませんか。

輝く仲間と踏み出す夢への第一歩

総合診療科プログラム ｜ 2年次 浅妻 和樹先生

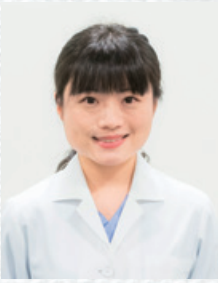
当プログラムでは、初診と再診の診察を研修医が主体的に取り組むことができます。外来における診断過程と慢性管理を経験でき、プライマリ・ケアの基礎を築くことができます。一方病棟では様々な社会的な背景を持つ患者さんが入院してきます。診断・治療を行うだけでなく、一人一人にあった社会的サポートの組み立てを間近で体験することができ、患者さんに寄り添った医療を学ぶことができます。加えて当院研修の最大の魅力は「多様性に富んだ仲間たち」に恵まれている点です。様々な夢・進路に向かって活き活きと研修している姿は、自分自身を「より上へ」、「より前へ」、「より外へ」、進み続ける力になります。医師人生の中で最も大切な2年間を、是非私たちと共に過ごしましょう！

SPECIAL REPORT

地域医療研修 VOICE

地域を訪れ
医療研修を行った
3人の元気な先生方の
地域研修レポートを
お届けします。

初めての岩手県で地域密着型の医療を行い、視野が広がった4週間



松本 千慶先生

2021年10月から11月にかけて約1ヶ月間、岩手県立千厩病院にて地域医療研修を行わせていただきました。4週間という期間は長いようで短く、あっと言う間に過ぎ去り、その中で患者が営む日常生活や居住する地域の特性に即した医療への理解を深めることができました。千厩病院は、岩手県南部の人口約5万人の東磐井地域に位置しています。高齢化率は約40%と日本でも有数の超高齢化地域の中で、稼働病床数148床、診療にあたる常勤医師は院長を含めて9人で支えている地域の中核病院です。臓器・疾患を問わない包括的な診療、また救急車年間1000台を目標に、断らない医療を掲げています。私自身、岩手県に赴くことは初めてであり、現地の患者さんや医療者の方々に新参者の私が果たして受け入れてもらえるのだろうか、と不安な面持ちで研修は始まりました。私がローテートさせていただいたのは泌尿器科でしたが、岩手県の泌尿器科は腎臓内科の領域も兼任しているため、幅広い疾患を扱うことができました。主な業務内容としては、病棟管理、専門外来、透析回診、手術、救急対応などでしたが、自身が普段研修を行なっている当院と比較して患者年齢層がとても高いことが特徴でした。また、それらの業務とは別で、当直業務も割り当てられていました。当直業務は基本的に研修医一人で初療を行うことになるため、どのような検査を行って治療を行うのか、患者の重症度を見極め、入院適応となるのか帰宅可能となるのか、これらを全て一人で判断しなくてはなりませんでした。普段当院で当直業務を行う際には、気軽に上級医にコンサルトできる環境でしたが、人口に対する医師数が決して多いとは言えないこの地域では、そうはいかないのが現状です。大きな責任を負いながら診療に臨むことに対する緊張感を常に感じつつ、時に自分の未熟さを痛感する日々でした。また、週末には業務を割り当てられなかったため、東北地方の様々な地域を訪れました。ちょうど紅葉真っ盛りの時期であったため、どこの県でも辺り一面カラフルで、新宿の中核病院でコロナ診療に明け暮れた私の心は、実際とても癒されました。COVID-19感染が猛威を振るうなか、私たちの研修を快く受け入れてくださった千厩病院の医療スタッフの方々、研修を行えるよう尽力してくださった全ての方々に感謝申し上げます。とても実りの多い1ヶ月となったことは、言うまでもありません。千厩病院での経験を活かし、これからのレジデント生活に励んでいく所存です。

イーハトーブ、東和病院での地域医療研修に寄せる

梅雨入りを目前に控えた6月某日、快晴の新花巻駅、釜石線のホームに立った私の目の前には長閑な田園風景が広がり、地域医療研修に来たことを実感させてくれるものでした。私は岩手県立東和病院で地域医療研修を行いました。東和病院は宮沢賢治の故郷であり、温泉地でもある花巻市内にある、一般病床54床、地域包括ケア病床14床、常勤医師5名の小規模な病院です。主に回復期、慢性期の治療を担っており、また地域のかかりつけ病院として外来診療、訪問診療を行っています。NCGMは急性期病院であり、普段は疾患の治療に重点を置きますが、地域医療研修はそれだけでなく、その先の、患者さんのこれからの生活、ひいては人生を共に考えるような場でありました。研修中の業務は、午前の外来診療と午後の病棟管理、2週に1回の訪問診療、週に1回の当直でした。外来は高血圧や糖尿病の内服管理や、慢性疼痛のコントロールなどが主でした。患者さんが超高齢者ばかりで、しかし皆さんとてもしっかりされていたこと、時折方言がきつすぎて話が全くわからないこと、「仕事」は基本的に畑仕事を指すこと、皆さん漬物が大好きで塩分摂取量が軒並み高いこと、などなど、都内とは全く変わった患者背景で印象的でした。外科外来では膝関節へのヒアルロン酸注射の患者が多く、膝関節腔の穿刺は多少自信がつきました。病棟管理は4名の患者を担当しましたが、主治医として、病状のICや退院調整、また終末期の治療方針についての相談などを行いました。高齢者は一度状態が崩れると一気にADLが落ちてしまいやすく、本人や家族にどう状況を受け入れていただくか、頭を悩ませました。訪問診療では病院から20km圏内の中で様々な住宅環境、土地背景のお宅へ伺いました。病院から出てアプローチしなければ届かない医療が多くあること、また患者さんが望む医療のあり方は一通りでないことを改めて実感しました。当直は医師1人、看護師1人での対応で、診療はもちろん、血液検査やレントゲン、CT撮影も自分で行わなければいけない環境でした。自分で診断をつけ、治療を行った際は達成感もありましたが、それ以上に未熟さを実感し、より一層の勉強が必要と感じさせられました。総じて、自分の判断に委ねられる場面の多い研修であり、強い責任感を抱えつつも、充実した研修でした。東和病院は職員の距離が近く、誰とでも話しやすい環境で、無事に診療を行えたのはひとえにスタッフの先生方やコメディカルの皆様の多大なサポートによるものです。この場を借りて感謝申し上げます。東和病院での研修は、私たちの医師人生において大きな糧となり、またこれからも研修医を成長させ続けるものと確信しています。

上村 拓先生

地域に根付いた医療経験で、「寄り添う」大切さを学んだ4週間

私は初期研修2年目の8月から9月にかけて、板橋区にあるやごうクリニックにて4週間の地域研修を行わせて頂きました。ちょうど1週間前に東京オリンピックの閉会式が行われ、その興奮が冷めやらない中、新型コロナウイルス感染症の「第5波」が直撃していた頃に研修が始まりました。やごうクリニックは帝京大学医学部附属病院や日本大学板橋病院、板橋中央総合病院などいくつかの大病院に囲まれている都会型の医療環境において、消化器・生活習慣病を中心とした総合診療を行なっているクリニックです。院長の矢郷先生は当院にて初期研修修了後、消化器内科レジデントとして勤務されていた経緯もあり、当院との地域医療の連携を作ってくださいました。NCGMでは総合診療科で外来研修を4週間行いますが、地域のかかりつけ医からの紹介状を持参し来院されるケースがあり、その中に、やごうクリニックからの紹介状も数多くみられました。今回は普段とは逆の立場で、大病院へ紹介する側から診療にあたる機会をいただき、地域連携の重要性を学ぶことができました。クリニックには連日130人前後の外来患者が矢郷先生の診察を心待ちに来院されます。今回、4週間の地域研修の間では2060例もの外来症例を診る機会がありました。この全ての患者さんを院長一人で診られており、NCGMの「断らない救急」を彷彿とさせていました。クリニックにはCTよりも高値と言われる超音波機械が置いてあり、矢郷先生の手技の技術力の高さと相まって、高い診断力を誇ります。ある日、採血結果では積極的に疑わなかった虫垂炎を超音波で診断し、NCGMへ紹介受診の上、外科入院となった方をみて、超音波診断の簡便性と重要性を学ぶとともに地域連携の大切さも実感しました。更に、クリニックでは外来診療のみならず、その合間を縫って訪問診療も行なっていました。長年、クリニックかかりつけであった患者様の終末期に立ち会う機会がありました。ご家族から「最期は先生に診てもらえて本当に良かった」と声を掛けられており、いつも外来で『寄り添う』ことを大切にしている矢郷先生だからこそ投げ掛けられた言葉だと思い、そのような医療を提供できるような医者でありたいと強く思いました。COVID-19が流行する中、首都圏を中心に医療体制が逼迫し、感染拡大のため地域研修の受け入れも厳しい状況だったと思いますが、矢郷先生はじめ、看護師、薬剤師、事務の皆さんなど、多くの方々が快く迎え入れて下さったことに大変深く感謝致します。医療には、時代や地域や患者さんのニーズに合わせて柔軟に変化することを求められますが、『寄り添う』大切さは普遍であり、それを改めて学ぶ機会をいただいたやごうクリニックの関係者の方々に感謝申し上げます。

松本 侑子先生

Cardiology

循環器内科 カリキュラム

臨床医の基本的知識・技能として、循環器内科での研修期間に身につけてもらいたいこと

急性心筋梗塞、肺塞栓症、大動脈解離の３大胸痛疾患、慢性心不全の急性増悪、発作性上室性拍などの頻脈、完全房室ブロック、洞不全症候群などの徐脈、弁膜症、心筋症、心筋炎、感染性心内膜炎、末梢動脈疾患の診断と治療を学ぶ。心電図、負荷心電図、ホルター心電図、心エコー、冠動脈 CT、心臓核医学検査、心臓カテーテル検査の理解と参加を求める。冠動脈危険因子など生活習慣の改善指導と適切な薬剤使用を身につける。月水金のカンファレンスでは、心臓カテーテル結果、新入院、重症症例について検討する。木は心臓リハビリテーション、薬剤、看護、栄養、退院後の医療体制を含めた総合的な討論を行い、病棟回診では VSCAN を使用する。

教育責任者
廣井 透雄
循環器内科診療科長

Respiratory Medicine

呼吸器内科 カリキュラム

豊富な症例数から、結核を含む感染症・肺がん・呼吸不全など幅広い呼吸器疾患を診療できる

主要症候である咳嗽・喀痰、呼吸困難、胸痛、喀血などに対する的確な診察方法を学ぶ。肺炎、肺がん、喘息、COPD、間質性肺炎など代表的な呼吸器疾患に関する必要な知識を習得するとともに、鑑別診断の手順、画像読影を基本に各種検査の方法と解釈、そして適切な治療法を修得する。週２～３回行われるカンファレンスでこれらについての適切なプレゼンテーション能力を身につける。急性呼吸不全患者も多く、気管内挿管や人工呼吸管理、胸腔穿刺などの手技も多数例経験可能である。また、卒前教育では学ぶ機会の少ない結核患者の診断診療を実際に経験できるのも大きな特徴である。さらに国際共同治験をはじめ、複数の臨床試験に参加し研鑽を積むことが可能である。

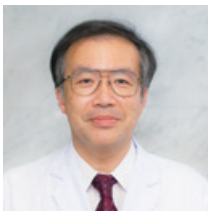
教育責任者
放生 雅章
呼吸器内科診療科長

Gastroenterology

消化器内科 カリキュラム

患者の視点に立った全人的な医療の提供、消化器病全般の知識と技能の習得、質の高い医療の実践

当科では消化管疾患、肝臓疾患、胆膵系疾患、消化器がん薬物療法にわたる消化器病全体の研修が可能である。臨床・研究の各専門領域に習熟した上級医（医師、フェロー）の指導の下、後期研修医は入院・外来・救急診療における診断・治療方針の決定・その遂行に第一線で当たっている。初期研修医はそれらチームの一員として疾患を幅広く経験し、診療技術を習得していく。目標として、①各疾患の病態生理、治療の基本から最先端までの理解、②内視鏡・超音波など各種検査の適応や特徴的な所見の習得、③カンファレンスを通じ、臨床における疑問点の解決方法や EBM の考え方の習得、が挙げられる。



教育責任者
柳瀬 幹雄
消化器内科診療科長

Nephrology

腎臓内科 カリキュラム

腎臓診療から全身を診られる優れた臨床医となり、血液浄化を通じ急性期医療を学び成長する。

腎臓は、全身のバランスを取る器官である。当科では慢性腎臓病（CKD）・腎炎・ネフローゼ症候群・腎不全（急性・慢性）・体液異常（電解質異常・酸塩基平衡異常・高血圧など）・腎代替療法（血液透析・腹膜透析・腎移植）など、多彩な病態を扱う。このため、内科一般を総合的に診療できる素養を身につけ、腎臓病学、合併症含め透析患者の管理、血液浄化療法の知識と技能を習得できる。当院は急性期疾患でも、国内有数の医療機関である。腎生検などから、科学的に正しい診断・治療を行い、血液浄化を通じて、急性期医療の全身管理が経験できる。豊富な症例を基に、学会・論文発表など積極的に行い、さらなる理解を深め、共に学び成長していきたい。

教育責任者
髙野 秀樹
腎臓内科診療科長

Diabetes, Endocrinology and Metabolism

糖尿病内分泌代謝科 カリキュラム

糖尿病を中心として内分泌代謝疾患の診断、治療、マネジメントを学び、研究に親しむ

当科での初期研修の目的は、内分泌代謝疾患全般について診断、治療、マネージメントを学び、実践的な力をつけることである。特に、糖尿病は生活習慣病の一つとして重要な疾患であり、種々の合併症をきたし、他の生活習慣病を伴うことも多い。また、内分泌疾患も重要な疾患である。初期研修では、糖尿病とともに内分泌疾患、肥満、高血圧、脂質異常症、電解質異常などについて研修する。また、症例検討会や抄読会に参加し症例や疾患に対する理解を深め、患者教育により慢性疾患のマネージメントについても学ぶ。さらに臨床研究や研究所との共同研究に触れることもできる。重要な症例や臨床課題については研究会や学会での発表を期待する。

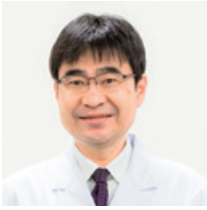
教育責任者
梶尾 裕
副院長、糖尿病内分泌代謝科診療科長

Hematology

血液内科 カリキュラム

造血器疾患を通して診断・治療法を学ぶとともに、疾患および化学療法に関連した全身管理を修得する

造血器疾患は、貧血や血小板減少などの日常的な疾患から、白血病や悪性リンパ腫などの悪性腫瘍まで多岐に渡る。当科の研修では、まず血球数の異常の鑑別診断ができることを目標とする。また入院症例の大部分は造血器腫瘍であり、多くは化学療法への反応が良好で治癒を目指せる。そのためには強力な化学療法が必要で、他の腫瘍にも共通する骨髄抑制に対する感染症対策や輸血などの支持療法を修得することが可能である。さらに血液疾患では分子標的薬などの新規薬剤が次々に開発されており、疾患研究から創薬、治療への応用の過程を学ぶことができる。当科では、積極的に造血幹細胞移植を行っており、移植医療についても経験することが可能である。



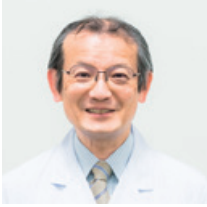
教育責任者
半下石 明
血液内科診療科長

Rheumatology

膠原病科 カリキュラム

全身性疾患である膠原病の研修は、多くの診療科に関わる知識が必要であり、将来あらゆる分野に役立つ

当科で入院治療するリウマチ・膠原病の症例数は、全国でも有数で、難治例や急性病態の症例を多く経験します。代表的な膠原病である関節リウマチは全国に70万人おり、日常的な疾患といえます。熱、筋・関節症状、または臓器障害をみた初診医が“ 膠原病かもしれない”と思う機会は結構あり、原因を特定しにくい病態にであったとき、膠原病を疑ってみることが診断の早道です。膠原病は全身性疾患である為、総合内科的な診断能力が求められます。SLE 一つをとってみても病態は多彩です。多臓器の障害の関連を分析するときも、膠原病の診療経験を役立てることができます。どの分野に進む人にも、当科の研修が将来の診療に役立つと思います。



教育責任者
金子 礼志
膠原病科診療科長

Neurology

神経内科 カリキュラム

都心で様々な神経疾患の経験を

当科が関わる疾患は脳卒中や痙攣発作などの救急疾患から、パーキンソン病などの変性疾患など多岐に渡るのが特徴です。当院は救急疾患が多く、脳卒中急性期や痙攣重積発作などが多数経験でき、さらに血栓溶解療法や脳外科と連携して血管内治療も経験できます。痙攣の診療に必須な脳波を自分で記録・解釈したり、抗てんかん薬の扱いにも慣れるようになります。また変性疾患の診療のための画像検査や核医学検査も充実しています。さらに他科との間の垣根が低く、他の内科領域でみられる疾患も経験できます。大学病院では経験できないcommonな神経疾患も経験できます。毎日楽しく明るい神経内科が目標です。ぜひ一緒に勉強しましょう！

教育責任者
新井 憲俊
神経内科診療科長

General Internal Medicine

総合診療科 カリキュラム

患者さんひとりひとりと向き合い、未診断例の診断確定や問題解決を目指す。

総合診療科外来を受診する患者さんは、診断が定まっていない common disease やなかなか診断を特定できない難解な病態を有していたり、複合的な問題を抱えていたりします。どんな症状、診療領域、経緯、社会背景であっても、患者さんの訴えを聴き、身体診察を重視し・必要な検査を計画し、診断確定や問題解決に繋げていくプロセスを十分に経験していただきます。毎朝のレクチャーで皆さんのスキルアップを促進し、また自ら学習成果を発表したり、毎夕経験症例を振り返ったりすることを通じて、医師に必要な自己省察と能力向上を図ります。病棟研修の場合は主治医として入院診療のマネジメントをしていただきます。

教育責任者
稲垣 剛志
総合診療科診療科長

Department of Emergency

救急科 カリキュラム

救急科初期診療ことはじめ：救急患者の初期診療に必要なアプローチ法を身につける

①救急患者の状態を把握し、不安定な場合には呼吸・循環を安定化する能力　②一見安定化しているように見えて、実は重篤である（もしくは後に重症化する）症例を見逃さない能力、の養成を計12週間の研修期間の主たる目標とする。当院は年間約11,000台の2・3次救急搬送を受け入れ、多種多様な救急患者が来院するが、当科の研修はこういった救急搬送患者の初期診療を行う事が中心となる。一般化された救急初期診療のアプローチ法を用いて数多くの症例を経験し、ベッドサイド及びカンファレンスにて上級医からフィードバックを受け、更にミニレクチャーやシミュレーション実習を定期的に行うことで上記2 目標の達成を目指す。また希望者には外因性疾患を中心とした病棟管理や集中治療を4 週間経験できる。

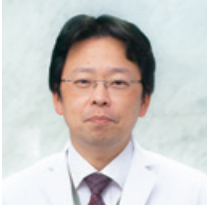
教育責任者
小林 憲太郎
第二救急科医長

DCC

総合感染症科 カリキュラム

医師として必須の、感染症の診かたを身につける

感染症は、市中感染症、院内感染症として、多くの診療分野でも診断治療に関わる。こうした感染症診療を行う上で必要な、内科の一般診療の知識とともに、感染症の診断、治療、感染対策の論理的な考え方や実践をベッドサイドでの研修を通して習得することを目標とする。期間は原則4週間で、総合診療・感染症科入院症例やコンサルテーション症例を通して行う。習得目標：①適切な症例プレゼンテーションの実施、②論理的な診療記録の記載、③発熱患者の診療に対する考え方の理解、④各種抗微生物薬の特性の理解、⑤感染症の治療評価方法の理解、⑥グラム染色の的確な実施、解釈、⑦感染症に関する検査の適切な理解、抗菌薬の選択、⑧感染対策の理解と実践



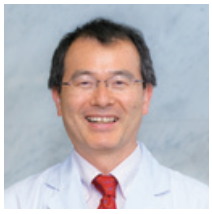
教育責任者
大曲 貴夫
国際感染症センター長

ACC

エイズ治療・研究開発センター（ACC）カリキュラム

HIV診療では国内随一のセンターで他施設では経験出来ない多彩な日和見疾患と最先端のHIV治療を学ぶ！

ACCは薬害エイズ被害者救済の一環として平成9年に設立された。入院および外来患者数ともに日本最大級であり、HIV感染症に対する最先端の医療を行っている。HIV感染症は世界三大感染症の一つであるが、初期臨床研修でHIV診療を経験できる施設は国内にはほとんどない。当科での臨床研修の目標は、HIV感染症とそれに合併する多彩な日和見疾患の診断・治療を経験する事はもちろん、免疫不全を背景として発症する一般感染症診療の基本について学ぶ事である。HIVでは感染症以外にも多種多様な疾患を同時合併しうるため、系統だった診療アプローチを症例毎に学んで頂きたい。自由選択の候補にもおすすめです。



教育責任者
菊池 嘉
臨床研究開発部長・ACC 治療科長

Cardiovascular Surgery

心臓血管外科 カリキュラム

外科医にとって必要な、血管操作、重症症例管理、チーム医療、を知りそして学ぶための研修

心臓血管外科は外科学の中でもとりわけ機能外科であり、失われた機能を手術によって回復させることを主眼としている。そのための術前診断、手術適応、集学的治療体系的の学習に重点を置き、手術手技と周術期管理にチームの一員として参加する、臨床経験に重点をおいた研修となる。心臓血管外科だけでなく、全てのジャンルの外科を目指す研修医にとって、基礎となる血管の扱い方を習得でき、開胸操作や小血管手術は習熟の程度により術者として経験することができる。外科医療に必須であるチームとしての医療の大切さを経験し、その重要性を認識できるように臨床研修指導を行っている。

教育責任者
宝来 哲也
心臓血管外科診療科長

Thoracic Surgery

呼吸器外科 カリキュラム

肺がんから、炎症性肺疾患など、すべての呼吸器外科疾患に対応できる外科医を目指した研修

呼吸器外科が扱う疾患として、肺がん／縦隔腫瘍があるが、結核、非結核性抗酸菌症、真菌症、膿胸等、感染性疾患の手術にもすべて対応している。術式はロボット手術から、完全胸腔鏡下肺葉切除や区域切除から、開胸での拡大手術、サルベージ手術まですべてを行う。肺がん／縦隔腫瘍に関しては、毎週行われる呼吸器内科・放射線科との3科合同カンファレンス（キャンサーボード）で集学的治療も習得できる。時に胸部外傷の緊急手術も経験することもできる。手術には助手として参加し、切開・縫合・結紮などの基本的な外科技術を習得するが、自然気胸や肺部分切除などは術者としても経験できる。

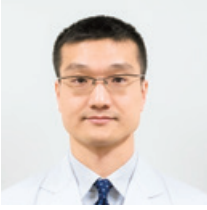
教育責任者
長阪 智
呼吸器外科診療科長

Neurosurgery

脳神経外科 カリキュラム

大学医局に属さず脳神経外科専門医を取得できる都内唯一の後期研修プログラムにつながる『重点コース』です

国立国際医療研究センター病院脳神経外科では脳神経外科医を目指す初期臨床研修医を対象に、外科系プログラムのなかに『脳神経外科重点コース』を設置しています。当院は日本脳神経外科学会専門研修プログラムの基幹施設であり、複数の連携施設と協力し脳神経外科専門医を目指す専攻医の教育に当たっています。重点コース選択の研修医は、初期臨床研修医から専攻医まで一貫した研修を行うことができます。救命救急センターでの都内有数の搬送数を背景に、救急脳神経外科疾患、脳腫瘍、脊椎疾患まで豊富な症例経験を早期から専門的に積むことが可能です。将来の脳神経外科専門医を希望する学生さんのご相談・ご応募をお待ちしています。



教育責任者
井上 雅人
脳神経外科診療科長

Surgery

一般・腹部外科 カリキュラム

プライマリ・ケアを身につけ一般外科のみならず外科系他科を目指す場合の基礎を学ぶ

このカリキュラムではコアプログラム８週は外科にて清潔操作、創傷処置の基本・周術期の全身管理・手術適応の考え方などの基礎的な事項を学ぶ。外科選択の４週は、コアプログラム研修で不足した消化器外科各グループ（上部、下部、肝胆膵、乳腺内分泌）における専門的な内容を履修し、外科専門医取得に必要な疾患と手術を担当する。この外科選択の研修は外科専門医研修（外科、心臓血管外科、呼吸器外科）の３年間を加えたローテーションにより、外科専門医必要症例数のほぼ100％が確保できるようにローテーションを組むことが可能である。さらに、学会発表や論文作成にも力を入れている。希望者は、研究所との共同研究も可能である。

教育責任者
山田 和彦
消化器外科診療部門長
食道胃外科診療科長

Surgery

食道胃外科 カリキュラム

消化器外科は『手術』という最大の武器を持つだけではなく、『全身管理』も習得できる

上部消化器疾患（食道癌、胃癌）を中心に診療にあたっている。腹部緊急疾患（虫垂炎、イレウス、消化管穿孔他）にも対応。その内容は、外科手術（開腹、開胸、内視鏡外科手術）はもちろんだが、周術期管理、栄養管理、発表や研究など多岐に渡る。研修内容は、病棟を中心に、一般的な管理（処置、オーダー、CVやPICCの挿入）から、総合力が求められる周術期管理、基本手術手技（開腹、内視鏡手術のカメラ持ち、縫合練習）、化学療法、緩和ケア治療、栄養療法の実際などが中心となり、さらに学会発表やカンファレンスでの指導も行われる。また希望者は研究所での免疫染色などの実験や統計処理などの学術的な面も学ぶことも可能である。

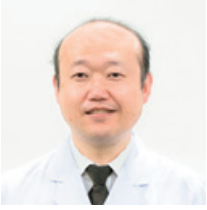
教育責任者
山田 和彦
消化器外科診療部門長
食道胃外科診療科長

Surgery

大腸肛門外科 カリキュラム

良性悪性を問わず、基本的な手術から超高難度手術まで、予定・緊急手術を含めて幅広く経験できる

大腸外科では癌のみならず憩室炎、潰瘍性大腸炎やクローン病などの炎症性腸疾患を含む極めて多様な疾患を扱い、多数の予定手術および救急手術を行っている。癌の根治術では緻密な術前画像シミュレーションをもとに大部分を腹腔鏡下手術および最先端のロボット手術にて行っており、この過程を学び参加することができる。また腹膜偽粘液腫や大腸癌腹膜播種といった他施設で切除不能とされる難治性の腹膜疾患も積極的に手術による治癒を行っており合わせて貴重な経験を得られる。小手術の執刀も希望により可能であり多彩なカリキュラムである。



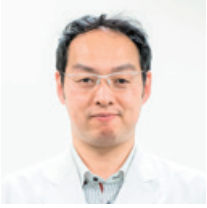
教育責任者
清松 知充
大腸肛門外科診療科長

Surgery

肝胆膵外科 カリキュラム

基本の外科手技から腹腔鏡・高難度手術まで

肝胆膵外科では、様々な肝胆膵領域の疾患を担当する。開腹･腹腔鏡下胆嚢摘出術、肝臓癌、転移性肝癌に対する肝切除術、胆道、膵頭部腫瘍に対する膵頭十二指腸切除術、膵体部腫瘍に対する膵体部腫瘍に対する膵体尾部切除術や、肝腫瘍、膵腫瘍に対する腹腔鏡下肝切除・膵切除も経験でき、他に一般外科の緊急手術も持ち回りで担当している。また、鼠経ヘルニアの手術も当科で担当するため、研修医のうちに外科医としての登竜門であるヘルニア手術、胆嚢摘出術を執刀するチャンスもある。手術に臨むための基本的な知識、治療方選択の考え方、手術方法、術後管理方法が総合的に研修可能なカリキュラムを組んでおり、指導医とともにそれらを学ぶことができる。また、タイミングが合えば膵島移植術を経験することもできる。



教育責任者
竹村 信行
肝胆膵外科診療科長

Surgery

乳腺外科 カリキュラム

がん診療の基本が乳癌診療に集約されています。そんな乳癌診療を一緒に経験しませんか。

乳癌は日本人女性の罹患する第1位の悪性腫瘍です。乳腺外科では画像診断、針生検、手術療法、薬物療法を自ら実践します。また術前・術後を含めた化学療法、再発治療を乳腺・腫瘍内科と密接に連携して個々の患者さんに最適な治療を提供しています。今、医療の世界で求められるチーム医療の先駆けです。最近、世間で話題となっている遺伝性乳癌に対する予防的手術やサーベイランス、あるいはAYA世代のがん患者さんへの対応も乳腺センター（内科・外科）で経験できます。また当院は総合病院という性格上、幅広い年齢層、合併症の有無など様々な患者の診療を経験できます。将来の医療を背負う皆さんと一緒に働けることを楽しみにしています。

教育責任者
北川 大
乳腺外科医長

Urology

泌尿器科 カリキュラム

尿路性器系疾患に対する基本的知識の習得と診断、治療における初期診療の研修

教育責任者
宮嵜 英世
泌尿器科診療科長

副腎、腎、尿路系、前立腺を中心とした悪性腫瘍の診断から治療まで、手術治療、化療、放射線等総合的に行っている。これらの基本的知識の習得とプライマリーケア、実践的診療と手術手技の研修を行う。当科の特徴は最先端のロボット支援手術や腹腔鏡手術を中心とした低侵襲治療を積極的におこなっていることであるが、研修中にはこれらの手術への参加を通じて、泌尿器科疾患の管理法について理解を深め、一般臨床で遭遇する泌尿器科的問題点に対する対応法を習得することを目標とする。初期研修カリキュラムは、泌尿器科専門医をめざす場合は臨床研修 2 年間のうち 20 週間を選択できるが、多様な組み合わせの研修コースにも対応が可能である。

Anesthesiology

麻酔科 カリキュラム

多彩な手術症例を通して麻酔管理のながれを理解し、安全に配慮した全身管理の知識と手技を習得する

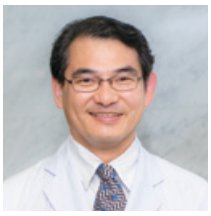
教育責任者
長田 理
麻酔科診療科長

当科の研修では、1）生理学・薬理学等の基礎医学から手術室麻酔での臨床医学の知識を得ると共に、2）手術室麻酔で実施される基本的な手技を習得し、3）麻酔管理の安全性を向上させている考え方について理解を深めることが目標である。具体的には、呼吸循環管理、疼痛管理、救急蘇生、栄養代謝管理などの全身管理を遂行するための知識と、静脈確保、気道確保・気管挿管などの必須手技、そして多数のスタッフが協働する手術室の安全管理手順を習得する。当院では低侵襲手術から高侵襲手術までの幅広い手術術式・緊急手術症例管理、多様な合併症を有する患者管理を経験でき、麻酔科研修施設としての教育環境に恵まれている。

Dermatology

皮膚科 カリキュラム

頻発皮膚疾患の一般的知識を修得し、基本的な皮膚科的手技をマスターすることを当面の目標とする



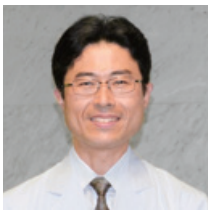
教育責任者
玉木 毅
皮膚科診療科長

皮膚科専攻を希望する初期研修医の場合、コアプログラム以外の 36 週の内、24 週を皮膚科研修にあてる。皮膚科専従の 24 週で幅広い皮膚疾患を網羅することは困難であるため、まず頻発皮膚疾患についての診断・治療・生活指導を行い得る知識を修得し、手技的にも基本的なものに限定して完璧にマスターすることを当面の目標とする。この後、5 年間の後期研修によりさらに皮膚疾患への知識を網羅し、より専門的な手技を修得していく。当院は日本皮膚科学会認定専門医基幹施設（旧制度における主研修施設）であるが、大学病院等の他院での専攻医研修も併せて行うことを勧めている。

Orthopedics

整形外科 カリキュラム

整形外科の基礎を学び、外傷の初期治療から基本的な手術手技、術前術後の管理を習得する



教育責任者
桂川 陽三
整形外科診療科長

筋骨格系の外傷や変形に起因する疾患群は一般臨床の場で頻繁に遭遇するが、これらのプライマリーケアから専門的な治療までの過程を通して、基礎的知識と診療手技を習得するのが目的である。年間約 800 件の手術を行っており、専門性の高い人工関節手術を始め、骨折の内固定手術から関節鏡視下手術までその種類は多岐にわたる。研修医は入院患者を担当し、専門医の指導の下、手術を始め骨折のギプス固定や脱臼整復などすべての治療に参加する。週 1 回研修医を対象に基礎的な整形外科知識についてマンツーマンの指導をしている。研修期間中に可能な限り小手術を執刀し、教育的な症例に関して他施設との合同研究会でプレゼンテーションを担当する。

Ophthalmology

眼科 カリキュラム

眼科を志望する研修医、眼疾患と関連深い診療科を目指す研修医を対象としたプログラム

教育責任者
永原 幸
眼科診療科長

眼科を志望する研修医、眼疾患と深く関連する診療科を目指す研修医を対象にした、4 週間の選択カリキュラムである。特に脳神経疾患に伴う眼疾患、HIV 関連の眼感染症、眼窩底骨折、甲状腺眼症、自己免疫疾患に伴うぶどう膜炎、糖尿病網膜症、高血圧性網膜症など、各専門科と連携して治療に取り組めることを目標としている。さらに、日本眼科学会専門医研修カリキュラムに準拠したカリキュラムが用意されている。具体的には、各種検査の目的、診察の手順、診断の進め方を理解し、患者の診察を単独で行えることを目標とする。

Otolaryngology

耳鼻咽喉科 カリキュラム

耳鼻咽喉科領域の知識や技術の習得にとどまらず、医師としての基本的な資質も身につける

当科は耳、鼻、口腔・咽頭、喉頭、気管、食道、頭頸部と広範囲の領域の多彩な疾患について、新生児から老人まで診療する科である。4 週間カリキュラムは将来他科を志望する研修医が耳鼻咽喉科領域の基礎的事項を学ぶ事を中心とし、診療科重点コースは専門医を目指す研修医が耳鼻咽喉科診療の基礎的技術を身につける内容となっている。単に知識や技術の習得にとどまらず、患者と接する医師としての基本的な資質も身につける。外来や病棟での診療に加え、多くの手術に参加する事で耳鼻咽喉科・頭頸部外科の臨床経験を積む。カンファレンス、抄読会、症例検討会などを通して最新の知識の習得にも努め、学会発表も積極的に行う。

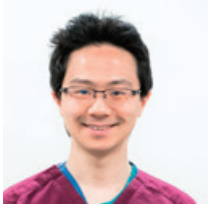
教育責任者
田山 二朗
耳鼻咽喉科診療科長

Plastic and Reconstructive Surgery

形成外科 カリキュラム

スーパーマイクロサージャリーの世界へようこそ！　一緒に世界最先端の技術を駆使した再建手術をしましょう

当科は「0.5mm 未満の血管吻合技術：スーパーマイクロサージャリー」を駆使した再建手術が特色で、基本的な創傷管理・外傷治療・縫合手技を豊富な症例を通して習得するとともに、世界最先端の再建手術に参加してもらいます。腫瘍切除術などの執刀はもちろんのこと、可能な限りマイクロ・スーパーマイクロも練習してもらい、実際に微小血管吻合を行ってもらいます。現在はコロナ禍の影響でいませんが、2022年以降は臨床修練医として外国人医師がチームに在籍予定です。日常的に英語でのディスカッションがあるほか、ローテーション期間中に1 本以上の英語論文報告をしてもらいます。（注：すぐに慣れるので英語が苦手でも大丈夫です）



教育責任者
山本 匠
形成外科診療科長

Physical Medicine and Rehabilitation

リハビリテーション科 カリキュラム

脳神経・運動器・循環・呼吸・嚥下機能まで総合的に診ます！

リハビリテーション医学では、中枢神経系の可塑性や、運動機能の改善、心臓から末梢血管までの循環機能、呼吸機能、嚥下機能などに対応しています。リハビリテーションは後遺症に対する訓練にとどまらず、急性期病院においても、多病時代の患者を総合的に診てさまざまな治療手段を導入することで、内科疾患・外科疾患の予後の改善に寄与しています。研修面では、当院では他のリハ指導施設と比べても特に多彩な症例の経験が可能であり、多数の科との連携のもと、多職種連携、チーム医療で求められる医師の育成を目指します。研修医の臨床研究も論文執筆までサポートしています。

教育責任者
藤谷 順子
リハビリテーション科診療科長

Pediatrics

小児科 カリキュラム

こどもの「総合診療医」になろう！

こどもは、小さくて、上手に話ができなくて、上手に動けなくても、自分の意思を持つ人間です。常に成長し発達します。全ての臓器疾患があり精神的疾患があります。本プログラムではこどもの正常な成長と発達とその障害について学習します。また感染症・熱性けいれん・気管支喘息やアレルギー疾患・消化器などの日常多く見られる疾患や、新生児疾患・小児がん・川崎病・脳炎脳症・心筋炎・神経筋疾患など重篤な疾患を診療します。多くの診療を通じて、こどもと、こどもをとりまく人や社会や環境も含めて総合的に対応ができ、疾患を持ちながらも成長発達することを配慮できる「総合診療医」となるために必要な知識・技能・態度を修得していきます。

教育責任者
七野 浩之
小児科診療科長

Obstetrics and Gynecology

産婦人科 カリキュラム

将来産婦人科を専攻しようとする研修医を対象とした産婦人科研修を行うプログラム

上級医がマンツーマンで指導を行うことにより、基本的な産婦人科診察法を身につける。婦人科入院患者に対しては上級医とともにチームを作り、受持医の一員として患者の診療にあたる。婦人科腫瘍学、生殖医学、周産期学、女性ヘルスケアについてバランスよく学ぶことが可能である。産婦人科ローテーション中は、月５～６回の産婦人科副当直を勤めることにより産婦人科救急疾患の診断治療に習熟する。研修終了時には開腹による良性附属器腫瘍などの執刀者となるほか、正常分娩の立ち会いができるようになる。また、自験例の症例報告や臨床統計に関する学会発表を行う。

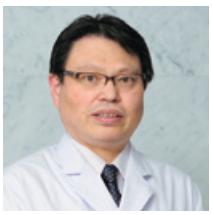
教育責任者
大石 元
産婦人科診療科長

Radiology

放射線科 カリキュラム

画像診断における検査および読影方法を習得するとともに、放射線科に必要な基礎的事項を網羅的に修練する

放射線科は全身臓器を対象とし、診断から治療に至るまで多岐にわたる診療を行なっている。放射線診断、核医学、放射線治療の三つの分野から構成され、臨床研修期間においても上述した三つの診療科のローテーションが可能である。本プログラムでは、研修医として必要とされる放射線医学の基礎的な修練を行うとともに、臨床各科の診療において必要となる画像診断分野の基礎的事項の修得に努める。各種モダリティにおける基本的検査手技、読影手法、検査の適応や鑑別診断の考え方なども実地指導やカンファレンスを通じて指導していく。放射線治療分野における悪性腫瘍に対する治療計画等の実地研修も希望により実施できる。



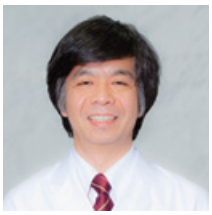
教育責任者
田嶋 強
放射線診療部門長

Clinical Pathology

病理診断科 カリキュラム

臨床志望者にも病理志望者にも必要な病理学の基礎知識の習得

診療科重点コースでは、臨床医学としての病理学（外科病理学）を根本的に理解することを重点に研修を行う。実際の業務を通じて、検体取り扱いの基本、所見のとり方、診断にいたる文献参照のコツ、学会発表などの指導が行われ、以後の病理研修継続に資するものである。4週間のローテートカリキュラムは、他のコースを選択した研修医にも短期の病理研修を可能としたものである。希望に応じ将来病理科選択も検討にいれている研修医には全般的な基礎を、将来他科を専門とする研修医には今後の専門に応じた臓器の知識を得ることを中心とした研修を行い、病理学に理解のある臨床医の育成を目標とする。



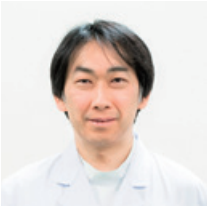
教育責任者
猪狩 亨
中央検査部門長

Psychiatry

精神科（センター病院）カリキュラム

患者の訴えに耳を傾けつつ寄り添い、心身両面からの視点を忘れない臨床医の基本姿勢を養成する

精神科病棟は稼働しておらず、コンサルテーション・リエゾン診療が中心となる。せん妄、自殺未遂、症状精神病、身体疾患による精神的苦痛を抱えた患者、精神疾患と身体疾患を合併している患者など、幅広く豊富な症例を経験できる。精神科リエゾンチーム、認知症ケアチーム、緩和ケアチームなどのチーム活動にも参加する。また、外来においては新来患者の予診をとった後に本診に陪席し、精神疾患の診断や治療について学ぶ。本カリキュラムにより、精神症状の捉え方の基本を身につけ、主要な精神疾患の病態と治療法を学ぶことができる。また、多職種スタッフや他科との連携を経験することにより、将来の専門科を問わず、臨床力の涵養も期待できる。



教育責任者
加藤 温
センター病院精神科診療科長

Oncology

乳腺・腫瘍内科（がん総合診療センター）カリキュラム

がんの診断と治療、がん診療のリーダーして必要な基本を身につける

「腫瘍内科」は、がんの薬物療法を専門的に扱い、院内外のがんの患者の治療や暮らしの支援に関連する様々な診療科や部門と連携して、ひとりひとりのがん医療をコーディネートする診療科です。研修では積極的に診療に参加していただきながら、がん診療の基本を理解し、患者とともに治療方針を決め、有害事象を管理しながら安全に薬物療法を行うことができるようにします。臨床で生じた疑問や抄読会等さまざまな場面で医学論文の批判的吟味について身につけていただき、科学的な思考や論文作成についても取り組みます。がんはどの診療科に進んでも関わることのある疾患です。ともに学びましょう。

教育責任者
清水 千佳子
乳腺・腫瘍内科診療科長

ICU

集中治療科 カリキュラム

重症入室患者のプライマリーケアから全身管理、多職種連携医療を幅広く経験することができる初期研修

当科は様々な診療科と協調して診療を行う semi-closed ICU であり、高侵襲度手術の術後管理、重症入室患者の全身管理に加え、CCU 機能も担う総合 ICU である。診療科がその専門性に基づき展開する呼吸・循環・代謝・栄養管理を一度に学ぶことができ、特に人工呼吸管理（緊急挿管、安全な離脱と抜管、NPPV）や ECMO、IABP、緊急透析・CHDF などといった一般病棟では経験できない高度医療を経験できる。また、RST（呼吸ケアサポートチーム）や NST（栄養サポートチーム）、RRS（院内急変対応チーム）、そして早期離床・リハビリテーションチームといった多職種連携医療も経験できる。

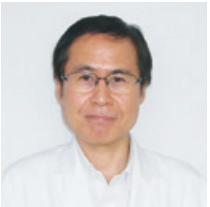
教育責任者
岡本 竜哉
集中治療科診療科長

Psychiatry

精神科（国府台病院）カリキュラム

精神科救急と身体合併症治療を軸として、先進的な精神科診療の実際を総合的に経験する

千葉県の精神科救急基幹病院に指定されており、積極的に精神科救急及び身体合併症の診療に当たっている。経験できる症例は豊富であり、救急対応から急性期治療、さらには回復期から退院に向けての支援までの様々な局面の診療を経験することが重要と考えている。すべての局面において、多職種の医療スタッフによるチーム医療を実践しており、種々のカンファレンスや地域のスタッフも交えたケア会議などを通じて、チーム医療の重要性を経験して欲しい。重症精神疾患に対する治療であるクロザピン治療や電気けいれん療法も積極的に行っている。また、精神科リエゾンチームによる他科入院患者の精神科的問題に対する対応も経験できる。



教育責任者
早川 達郎
国府台病院精神系統括診療部門長

SPECIAL CONTENTS

研修生活

当院では、様々な診療科を
ローテートしていく
研修医をサポートできるよう、
各診療科の教育熱心な指導医はもちろんのこと、
医療教育部門、プログラム責任者、
チーフレジデントなど
様々な業種や立場の方の協力を得ながら、
バックアップをします。

各種セミナー・講習会

教育セミナーの一環である縫合講習会の風景。外科医の指導のもと、糸結びと縫合を学びます。

研修医向け教育セミナー【毎月数回開催】

研修医に是非とも習得していただきたい内容についての、チーフレジデントや指導者そして研修医自身によるセミナーです。テーマは「輸液」、「症例プレゼンテーション」、「院内発熱への対処方法」等の基本的な内容から始め、研修医が主体となって内容を決めていきます。

CPC (Clinico-Pathological Conference)【2か月に1回開催】

病理解剖症例を基に、医療行為を振り返る症例検討会。研修医複数名で共同して担当し、症例内容からプレゼンテーションまで臨床医、病理医から丁寧な指導を受けられます。症例発表後には、レポートを作成し提出することが研修修了の要件となっています。

ICLS

医療従事者のための蘇生トレーニング。救急科が主体となり、全研修医が必ず2年間の研修中に1回受講します。

感染症ワークショップ

国内で3カ所指定されている特定感染症指定医療機関の一つとして新感染症病棟を有し管理をしている感染症内科（DCC）が主催する研修。院内感染対策における基本知識や基本手技を実践を交えながら学びます。

CVC（中心静脈カテーテル）セミナー

当院では安全管理のため、院内ライセンスを取得した医師のみがCVCを挿入できることになっています。e-learningテスト、シミュレータレクチャーを受講することで、安全で効率的な挿入実践ができます。研修医の方には早期にライセンスを取得していただくようサポートします。また、PICC（末梢留置型中心静脈カテーテル）ハンズオンセミナーも開催しています。

サポート環境

プログラム責任者

各プログラムは、プログラム責任者と副プログラム責任者が設置されており、他科をローテーション中でも適宜アドバイスを受けることができます。1年次、2年次に行う年2回の面談では、臨床研修到達目標を確認の上、不足なく今後の研修を行えるよう配慮し、経験すべき症候（29項目）と経験すべき疾病・病態（26項目）については、プログラム責任者が、各研修医の症例の要約等の状況を確認して、確実に経験できるように配慮します。また、面談では、それぞれの研修医に合ったキャリア形成についても相談にのってもらえます。

研修環境

シミュレーションセンター

安全で質の高い医療を提供するため、シミュレーションを用いた教育が行えるよう2013年に設置されました。センターには、静脈採血、気管挿管などのモデルから、バーチャルリアリティーによる腹腔鏡手術や内視鏡のシミュレーターまであり、自主的な練習から院内の救急蘇生講習会にも活用されています。

総合医局

全机にLANを完備した医師専用オフィスです。学習はもちろん、読書や電子カルテへの入力作業、仲間との情報交換、時には休憩など、様々な目的で利用できます。

CAREER PATH
キャリア

専門研修（後期研修）と
その先を見据えたキャリアパスを形成する

臨床研修修了後の進路

2年間の臨床研修修了後に、引き続き当院の専門研修に進級する者は毎年平均40〜50%です。他には、大学病院や他の市中病院の専門研修に進む者、研究者の道に進む者、厚労省医系技官などの行政に就職する者、USMLEを受験して米国に臨床留学する者など、進路は様々です。当院では、研修医1人1人のキャリアプランに応じて、各診療科の指導医や医療教育部門スタッフに気軽に相談できる体制をとっています。

当センターにおけるキャリアパス

■ センター病院でのキャリアパス

臨床研修２年修了後、新専門医制度の基本領域専門研修期間にほぼ一致する３年間のレジデントコースを設置しています。レジデントは全国公募となるため、当院の研修医は外部受験者と共に選抜試験を受ける必要があります。レジデント課程修了後、選抜試験を受けてフェローに進級します。

■ NCGM内でのセンター病院以外のキャリアパス

NCGM では、センター病院以外にも、千葉県市川市にある国府台病院、臨床研究センター、国際医療協力局、研究所など、様々な施設があり、一般及び専門臨床、臨床研究、医療者の人材育成、国際保健医療協力など、本人の希望により、様々なキャリアパスを選択することが可能です。

■ センター病院医師の在籍状況とキャリアパス（2022 年 4 月現在）

臨床研修医	レジデント	フェロー	スタッフ医師	医長	部長以上
2年間 67名	3年間 78名	3年間 57名	119名	69名	10名

卒後　2年　5年　8年　15〜20年　25〜35年

SPECIALTY TRAINING
専門研修
（後期研修）

専門研修（後期研修）の特色

手厚い指導体制で専門臨床能力を培います

学会認定専門医および指導医クラスの医師がマンツーマンで手厚い指導を行います。全国から集う150名を超えるレジデント及びフェローと切磋琢磨される環境下で、効果的に専門臨床能力を身につけることができます。

専門医資格の取得を保障します

基本領域専門医はもちろん、サブスペシャリティ領域専門医の資格取得に関しても、ナショナルセンター、大学病院、国立病院機構（NHO）、他の市中病院などと密接に連携し、十分な症例、手技、手術数を確保し、資格の確実な取得を保障します。

博士号取得をバックアップします

当センターは、東京大学、慶応大学、順天堂大学、筑波大学など、首都圏主要大学の臨床系ならびに社会人大学院と連携協定を結び、専門研修を継続しつつ臨床研究を行い、論文を作成して学位を取得することが可能な体制をとっています。

詳しくはNCGMセンター病院
医療教育部門の
専門研修ホームページを
ご参照ください。

当院は以下の学会または領域における教育認定施設となっております（全73分野）

- 日本アレルギー学会認定教育施設
- 日本がん治療認定医機構認定研修施設
- 日本病院総合診療医学会認定施設
- 日本ペインクリニック学会認定医資格指定研修施設
- 日本リウマチ学会教育認定施設
- 日本リハビリテーション医学会認定研修施設
- 日本医学放射線学会認定放射線科専門医修練機関
- 日本栄養療法推進協議会 NST 稼働認定施設
- 日本外科学会専門医制度指定修練施設
- 日本外科学会認定医制度認定修練施設
- 日本核医学会認定医教育病院
- 日本核医学会認定専門医教育病院
- 日本感染症学会認定研修施設
- 日本肝臓学会認定施設
- 日本眼科学会専門医制度認定研修施設
- 日本気管食道科学会認定専門医研修制度
- 日本救急医学会救急科専門医指定施設
- 日本胸部外科学会認定医制度指定施設
- 日本形成外科学会教育関連施設
- 日本血液学会認定研修施設
- 日本呼吸器外科学会専門医制度関連施設
- 日本呼吸器学会認定施設
- 日本呼吸器内視鏡学会認定施設
- 日本口腔外科学会専門医制度指定研修機関
- 日本産科婦人科学会専門医制度卒後研修指導指定施設
- 日本耳鼻咽喉科学会認可専門医研修施設
- 日本周産期・新生児医学会認定施設
- 日本集中治療医学会認定専門医研修施設
- 日本循環器学会認定循環器専門医研修施設
- 日本小児科学会認定医制度認定研修施設
- 日本小児科学会認定小児科専門医研修施設
- 日本小児循環器学会専門医修練施設群
- 日本消化器外科学会認定専門医修練施設
- 日本消化器内視鏡学会認定施設
- 日本消化器内視鏡学会認定専門医制度認定指導施設
- 日本消化器病学会認定施設
- 日本心血管インターベンション学会認定研修施設
- 日本神経学会教育認定施設
- 日本腎臓学会認定研修施設
- 日本整形外科学会認定専門医研修施設
- 日本精神科学会精神科専門医制度研修施設
- 日本精神神経学会精神科専門医制度研修施設
- 日本静脈経腸栄養学会 NST 稼働施設認定
- 日本静脈経腸栄養学会実地修練認定教育施設
- 日本総合病院精神医学会専門医研修施設
- 日本大腸肛門病学会専門医研修施設
- 日本超音波医学会認定超音波専門医研修指定施設
- 日本糖尿病学会認定教育施設
- 日本急性血液浄化学会認定施設
- 日本アフェレシス学会認定施設
- 日本透析医学会認定施設
- 日本内科学会認定医制度教育病院
- 日本内分泌学会内分泌代謝科認定教育施設
- 日本乳癌学会認定医・専門医制度認定研修施設
- 日本脳神経外科学会専門医訓練施設（A 項）
- 日本脳卒中学会専門医研修教育病院
- 日本泌尿器科学会認定泌尿器科専門医教施設
- 日本皮膚科学会認定専門医研修施設
- 日本病院会指定優良一泊人間ドック施設
- 日本病理学会専門医制度認定病院（A）
- 日本放射線腫瘍学会認定施設
- 日本麻酔学会認定麻酔指導病院
- 日本輸血学会認定医制度指定施設
- 日本輸血細胞治療学会認定医制度指定施設
- 日本輸血細胞治療学会認定医制度指定施設認定
- 日本臨床検査医学会認定施設
- 日本臨床細胞学会認定施設
- 日本臨床腫瘍学会認定研修施設
- 日本 IVR 学会専門医修練施設
- マンモグラフィ検診施設画像認定施設
- 骨髄移植推進財団非血縁者間骨髄採取・移植認定施設
- 三学会構成心臓血管外科専門医認定基幹施設
- 東京都医師会母体保護法指定医師研修指定医療機関

令和5年（2023年）度採用　臨床研修医・研修歯科医募集要項

研修期間	令和５年（2023 年）４月１日から令和７年（2025 年）３月 31 日
修了の認定	必要な研修期間を満たし、厚生労働省の「臨床研修の到達目標」を達成すると、当センターの発行の「臨床研修修了証」が交付される。 本人が医籍登録の申請を行い、登録後、厚生労働省から「臨床研修修了登録証」が交付される。
募集定員	内科系プログラム：13 名、外科系プログラム：８名、救急科プログラム：３名、総合診療科プログラム：３名、 小児科プログラム：２名、産婦人科プログラム：２名、歯科プログラム：２名 ※令和４年度実績　医科 32 名、歯科２名
修了者の進路	医療教育部門のプログラム責任者やアドバイザースタッフと相談の上、 ■ 引き続き当院レジデント（専攻医）として専門研修を行う（研修医２年目にレジデント選抜試験あり） ■ 全国の臨床研修病院の専門研修プログラムに進む ■ 大学の専門研修プログラムまたは大学院医・歯学研究科などで研究医としてのキャリアに進む ■ 医系技官など、保健医療行政のキャリアに進む
研修医の 身分・処遇	■ 身分：非常勤職員（任期：２年） ■ 給与：時給 2,390 円 ■ 勤務時間：１週間あたり約３５～３９時間 ■ 保険：健康保険、厚生年金、雇用保険の適用あり ■ 医師賠償責任保険：個人で加入（紹介制度あり） ■ 住居：教育研修棟（個室、冷暖完備）に入居することを推奨する。月額使用料：共益費、光熱費、諸雑費を含め、２～３万円程度 ■ 院内各階および総合医局に研修医用スペースあり（インターネット環境有） ■ 健康管理：定期健康診断（年２回） ■ 福利厚生施設：院内食堂および喫茶店、売店（院内２４時間コンビニ）、理容室等 ■ 駐車場：なし（自家用車の持ち込みを禁止する）
アルバイト	禁止する
応募資格※1	■ 医師国家試験に合格し医師免許を受けた者のうち、原則として２年間継続して当センターで研修できる者 ■ 国立国際医療研究センター病院のプログラム同士の併願は認めない ■ 国立国際医療研究センター国府台病院臨床研修プログラムとの併願は可能とする
応募手続※2	**1. 事前エントリー** ■ 当院ホームページの医療教育部門に掲載されている「臨床研修医申込書」に必要事項を入力の上、メール添付で送付をする 送付先：mededu@hosp.ncgm.go.jp　件名「臨床研修医事前エントリー」 ■ エントリー後、提出書類を郵送する **2. 提出書類** ■ 臨床研修医申込書（エントリーした際のファイルを出力したもの） ■ 履歴書（当センター指定用紙、写真貼付）ホームページよりダウンロード ■ 卒業見込証明書 ■ 成績証明書（教養課程及び専門課程を含めたものを提出すること） ■ 返信用封筒（長３型封筒に住所・氏名を記入の上、８４円切手を貼付すること） **3. 送付先** ■ 〒 162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1　国立研究開発法人国立国際医療研究センター医療教育部門教育研修事務係 ※封筒表面に「臨床研修医申込み書類在中」と朱書きし、簡易書留とする **4. 申込み締切** ■ 事前エントリー：令和４年７月 15 日（金）午前８時 30 分 提出書類：令和４年７月 15 日（金）午後５時 00 分必着
選考方法※2	**1. 面接・口述試験** **2. 英語試験** ■ 応募者多数の場合、履歴書（エントリーシート）等の提出書類を用いて一次選考を行う ■一次選考の合否結果については、８月上旬に本人宛に郵送する
選考日時※2	令和４年８月 13 日（土）～８月 14 日（日）のいずれか１日　午前８時 30 分～午後６時までを予定
場所	国立国際医療研究センター病院
採用内定通知	医師または歯科医臨床研修マッチングの結果による
お問い合わせ先	〒 162-8655 東京都新宿区戸山 1-21-1　国立国際医療研究センター病院医療教育部門教育研修事務係 TEL 03（3202）7181（内線 2117）

※1「地域枠学生等」（地方公共団体等との契約により、奨学金等を得る代わりに、初期臨床研修中に一定期間の業務の従事を約束した学生等のこと）の申込み、及び、「地域枠学生等」（同）となった者がそれを辞退しての申込みは一切認めない。

※2 変更となる可能性あり。公式ホームページを随時更新いたしますので、併せてご確認いただきますよう何卒よろしくお願いいたします。

PAMPHLET MODEL

2年目研修医

館 由利香先生
井熊 玲央先生
大内 麻代先生
春日 憲太郎先生
窪田 成悟先生

1年目研修医

久保 美和先生
坂東 宏樹先生
伊藤 ひかり先生
東 大貴先生
小笠原 滉子先生

国立国際医療研究センター病院

〒162-8655　東京都新宿区戸山 1-21-1

ACCESS

1. 都営地下鉄大江戸線 若松河田駅より徒歩5分
2. 東京メトロ東西線 早稲田駅より徒歩15分
3. JR大久保駅または新大久保駅より都営バス「新橋駅行き」（約10分）国立国際医療研究センター前下車
4. JR新宿駅（西口）より都営バス「医療センター経由女子医大行き」（約20分）国立国際医療研究センター前下車

国立国際医療研究センター　国府台病院

〒272-8516　千葉県市川市国府台 1-7-1

ACCESS

1. JR市川駅より京成バス「松戸駅行き」（約15分）国府台病院前下車
2. JR松戸駅より京成バス「市川駅行き」（約20分）国府台病院前下車
3. 京成電鉄 国府台駅より京成バス「松戸駅行き」（約5分）国府台病院前下車

NCGM
National Center for Global Health and Medicine

国立国際医療研究センター病院

TEL 03-3202-7181　FAX 03-3207-1038
http://www.hosp.ncgm.go.jp/

各病院へのアクセスはこちらをご覧ください。
https://www.ncgm.go.jp/access/index.html